

『あなたに出会うためのクリスマス』

ルカ2：2-12

ルカの福音書 2：2-12

あなたに会うためのクリスマス」

マリヤたちは受胎告知を受けた時から、地域で様々なことを言われ、故郷から逃れていました。そのような中で、住民登録をしに故郷へ帰らなくてはならなくなりました。彼らの心情を考えると、色々な感情が推測できます。私達が、聖書の中のストーリーを読んでいくときに客観的ではなく、其感的に読むことが大切です。そうするとき、聖書は私達の心の内側に語り掛けていることを知ります。マリヤにいつ陣痛が起るか分からない、いつ赤ちゃんが生まれるかわからないような状況で旅をし、やっとの思いで現地に着いた途端、恐れていた事態、陣痛がきてしまい、ヨセフは必死に泊まるところを探しますが見つからず、このままでは母子ともに死ぬかもしれないという危機的な状況の中、ヨセフは、「神様が特別に与えると言われた子」であることを信じ、宿屋を一軒一軒まわり、やっとの思いで、見つけた先が家畜小屋でした。そこで、イエス・キリストはお生まれになりました。

イエス・キリスト

イエス・キリストがお生まれになった日に捧げるクリスマス礼拝は、まさしく【ミサ】です。ミサとは、“魂を贈るための神様への礼拝”という意味です。私たちが捧げる礼拝は、イエス・キリストの十字架の死に対する葬儀、そして十字架の死からの復活があるから礼拝となります。クリスマスの時期になると、よく演奏されるヘンデルの「メサイヤ」この楽曲の構成は、イエス・キリストの誕生から十字架、復活に至り、最後ハallelやコラスで終わります。その一つの楽曲に、イエスキリストの人生全てが描かれています。イエス・キリストの誕生に共感してみましょう。イエス・キリストは、旧約聖書にも登場しています。【イエス・キリスト】という名前では登場をしてはいませんが、ヤコブの記事に、現れます。イエス様が生まれた目的をこのヤコブの記事からも知る事ができます。

ヤコブ

父はイサクの元に、双子の弟として生まれました。産まれる時に兄のかかとを掴んで出てきたことから、『かかと』という意味の【ヤコブ】という名前がつけられました。生まれた時から、長子の権利を狙い作戦を練り争わなければならぬ立場となりました。ヤコブは作戦を考えるようになります。ある日、それは、狩りに出掛けてお腹を空かせてくたびれて帰ってきた兄が、スープを欲しがるように仕向けるためでした。スープを欲しがる兄に、長子の権利と交換にスープをあげました。兄は背に腹はかえられないといばかりに、簡単に交換してしまいました。後になりエサウの長子の権利を奪った事で兄エサウから嫌われて、ヤコブは遠くに行かざる得ない事態となりましたが、叔父のところに住んでいた時に、叔父の娘、姉妹の妹ラケルに恋をし、叔父さんにお願いをして嫁さんにもらおうとしましたが、交換条件として何年も働かされたり騙されたりしながら、やっとラケルを奥さんとして迎えましたが、働きの期間が満了しても、自由が得られず、あの手この手で苦しめられました。意地悪をされる中、遂に作戦を練り家族で逃げていきましたが、追いかけてくる叔父を怖がり、いつも不安にかられていました。

神様が共におられる

ある日、叔父の夢に神様が現れ、ヤコブと戦わないように伝えました。二人の間に境界線を引く契約を結び、叔父との問題は終息しました。次に兄エサウと対面しなければならない時がおとずれ、ヤコブはまた作戦を練りました。まずは、偵察を送り兄の様子を見に行かせました。兄は400人もの人を送りヤコブを迎えにしようとしていることがわかり、ヤコブは自分の不安から「これは戦争だ」と思い込み、一緒に叔父の元から逃れた自分の家族を、先発隊と二つに分け、機嫌を取るために、財産である家畜を贈り物として渡しました。また後発隊の家族を更に四分割にして、贈り物を送らせて機嫌をとるように考えました。当の本人は「どうぞ、不安でたまらず、死にたくない」為に一番最後に向かうことになりました。向かおうとしていた、その夜ヤコブは独り、神様の前に出ることになりました。幻の中で天に続く階段があり天使が行ったり来たりしていました。そして目の前に、ひとりの人が現れました。それが、はっきりと記されてはいませんがイエス、キリストであったといわれています。その人とヤコブは、朝まで戦いながら、遂にヤコブは勝ちました。しかし、最後に大腿骨の関節が外され、「あなたは誰ですか？」と問いつづけ、「祝福を下さらないと私は去らない！」と粘ると、「恐れるな。虫けらやヤコブ。わたしはあなたと共にいる。」と言つて下さいました。それでやっと安心をして、エサウの所に向う決断をしました。その時、太陽が輝いて彼を照らしていました。ヤコブは、今まで自らで作戦を練り、不安を抱いて考えてばかりいましたが、ただ共におられる神様の前に出れば良かつたのだとわかりました。

何を選びますか？

クリスマスの日、羊飼いも、マリヤ達もただ「どうぞこの身になりますよう」。と御言葉に聞き従いました。御使いに礼拝に行くように言わた羊飼いも、作戦を練るでもなく、自分の思いや考えではなく、ただ礼拝に向かったのです。私達は何を選びますか？

自分達の計画や作戦を練り続ける人生か、それとも神様の知恵をいただきながら進む人生を選ぶのか。

クリスマスの目的《エペソ書 1:4-5》

様々な恐れや不安、また葛藤があったかもしれません。しかし、イエス様は『世界の基を置かれる前から』傷の無い神様の子供しようとされていた。定めを受け取ることのできる方法は、子供たちのように手を差し出す事です。クリスマス、子ども達の素直な姿を見ることによって、私達の神様の前に在るべき姿をみる事ができます。

隔てられたものがひとつに《エペソ書 1:10-11》

バラバラになっていたものが一つとなる…ヤコブも兄弟がバラバラになっていましたが、ひとつとなりました。イエス・キリストは旧約の時代も今も、隔てられたものをひとつにする大きな計画を持っておられる事がわかります。私達の心の中には隔てられた自分…二つのものがいるのではないでしようか。本当の自分と、もう一つは、焦りや不安・神様を信じているに違うものを見、自分を傷つけ苦しめ、ズレた事をさせ、間違った言葉を発せさせるもの。この三つです。

今、私達の中にヤコブのような矛盾した生活はないでしょうか？神様が祝福するということを目で見てきたはずなのに、また、神様と共にいることが祝福である事を知っていたはずなのに、ヤコブの心はいつも怖れと不安からズレしていました。でも神様は、彼と共におられ祝福し続けました。ヤコブは晩年、神様にあるリーダを育てていく、そんな一人の父親に変えられていきました。イスラエルの子孫を守られるという神様の約束を体験しました。それは、アブラハム・イサク・ヤコブを守られた神様の約束であるイエス様の愛によって、今、私まで及んでいます。沢山の人のためではなくこれを読んでいる「あなたのため」です。世界中の人のためで無いのか？という疑問が生まれます。しかし、旧約時代、まだイエス様の誕生の時ではないにも関わらず、真剣にヤコブと戦い、負けて下さった。これが十字架のイエス様なのです。鞭うたれ、蔑まれ、罵られ、彼は全ての人の病を引き受けられました。多くの人は、「彼は、罰せられたのだ」と思いました。このように私達の目も、ズレて気づけないでいます。そんな私達に、十字架により、愛を示して下さいました。

《エペソ 1:17-19》

『エペソ人への手紙は、イエスキリストの降誕と目的が記されています。それは、私達が人生の中で、心の目がはっきりと見えるようになる為です。神の召しによって与えられる望みがどのようなものなのかを、知ってほしいと願います。』

走り切る

クリスマス、最初に光が与えられたのが羊飼いです。クリスマス、私達は羊飼いのようになることを願いたいと思います。羊飼いは、数にも数えられる蔑まれた役割を与えられ、価値無き者とされていたのです。しかし、彼らは夜な夜な羊の番をしながらいつか来て下さる救いの存在を待っていました。神様は、そのように信じて走り切ろうとする者に必ず恵みをもたらされる方です。神様の前に、欲しいものばかりを並べるのか、それとも守って下さいと祈るのか。以前のヤコブのように打算ばかり考える人生を選ぶのか、それとも神の知恵を求め、知恵の中で平安をいただくのか。ヤコブのストーリーの最後、兄エサウは走り寄ってきて弟ヤコブを抱きしめます。ヨセフのストーリーの最後も、憎んでいたはずだった兄弟を愛し抱きしめて、和解がもたらされました。また、放蕩息子のストーリーも、放蕩の限りをつくし自分を裏切った子どもを抱きしめゆるして愛します。私達の打算は必要ありません。

表切った子どもを抱きしめゆるして愛します。私達の打算は必要ありません。天の父は待っておられ、問題との解決を与えると聖書は約束して下さっています。聖書で出てくる、約束を得た全ての人物に共通しているのが“走り切った”という事です。『信仰の創始者であり、完成者であるイエスキリストを見失わないように。』と聖書で書かれている奥義は、私達が走っている最中に見失ってどこか道を逸れて行かないためです。私達は、自己中心にある強さに生きるのか、それとも内側にある弱さを認めて神様の前に出るのか、選ぶことが出来ます。クリスマスの日、神様の前に出る事を選ぶことを願いいます。